【準大賞】 古民家再生してのんびり田舎ライフを満喫してたら、
ときどき人が迷い込んで来るんですが、どうしてでしょうか？

著者：藍玉

「あ、そうそう、旭。父さんたち家買ったから」
久しぶりに実家に帰り、家族団らんの食卓を囲んでいる時だった。鍋から好物の鶏肉を取ろうと箸を伸ばしたところで、出し抜けに父親が言った。
「退職金でなぁ。これでやっと戸建てに住めるぞ」
「あっ、ああ、そうなんだ」
旭は取り皿にころんと転がった鶏肉の塊にかぶりつきながら言った。しまった、動揺して柚子胡椒を付け損ねた。
何の前触れもなく、いきなりの事後報告に驚いたものの、もう旭は社会人として独立している。都心にある会社に通うため、通勤時間 1 時間の狭いアパートで独り暮らしだ。事前に一言くらいは欲しかったとは思うが、どうせ口なんて出せっこないのだ。
「どこなの？　場所は。市内？」
「それがな、佐賀なんだけどな」
「えっ、どこだって？　サガ？」
日本地図がぐるぐると旭の頭を回る。
「九州の佐賀県だよ。そこのな、玄海町ってとこだ。ほら、前に父さんたちが旅行で行ったろう？」
「なに……九州ってマジ？　もう買っちゃったの？　契約済？」
「そうだ。引退したら田舎暮らしがしたいって言ってただろう。いろいろ旅行に行ったけど、あっこが一番良かったからな」
「母さんは？　いいの？」
隣でニコニコしていた母親は、苦笑して頷いた。
「もう父さんってば言ったら聞かないからねぇ。それに本当にあそこはいい土地だったし、父さんがとっても気に入って、毎晩楽しそうに話すもんだから。定年退職してぬれ落ち葉になるより、生きがいを持ってくれてたほうがいいかなって」
「ええ～～……だって、九州なんて、めったに会えなくなるじゃん」
「飛行機だったら二時間くらいだ」
「うーん……まぁ、もう決めちゃったなら仕方ないけどさ。引っ越しの日は決まってんの？」
「まだこっちで整理しなきゃならんことが多くて、半年後くらいを考えてる。買った家が古民家だから、改築を考えるとちょうどいいかもしれんな」
「……古民家って！」
父親は古い建物が大好きだ。文化財に指定されている〇〇家住宅などによく行ってい

たし、古民家カフェに連れて行ったらとても喜ばれて、それから常連になったらしい。DIYで古民家を店舗に改築したというそこのマスターとかなり仲良くなっていたから、感化されたのかもしれない。

最近はリノベーションが流行りで、同僚にも中古住宅を買って改築して住んでいる人がいるが、古民家となるとかなり大変そうだ。古民家カフェでも改築の様子を写真に撮って壁に飾っていたが、現代の建築とは工法からして大分異なっていた。

「床板剥がしたりするんだろ？　そういうのできんの？」

「そこで相談なんだがな」

ぐいっと座卓に身を乗り出してきた父親の顔を見て、過去のいろいろな記憶が一気に蘇ってきた。これは俗に言う『嫌な予感』という奴だ。

「大がかりな作業は地元の工務店さんに依頼するが、それを時々見に行ったり、庭の整備はお前にやって貰おうと思ってな」

「何言ってんの！　俺は仕事があるんだよ!?」

「長期休暇制度があるって言うとっただろ」

「そんなの簡単に取らせてもらえないよ……」

「……まあ、考えといてくれ」

明日は月曜日だ。会社のことを考えると、どうしても重苦しい気分になってしまう。

旭の表情から表情がすうっと消えて行った。

実家で温かいひと時を過ごした後、母親から土産を持たされた旭は、アパートに帰るために最寄り駅のホームで電車を待っていた。電車が来るまであと十分はある。僅かな時間でもぼうっとしていると仕事のことを考えてしまいそうで、旭はスマートフォンで大好きな小説サイトを開いた。

異世界ブームになってしばらく経つが、まだまだ面白い新作が出て来て飽きの来ないジャンルだ。

現世では冴えない主人公が不慮の事故で死んで、異世界に転生する。そこで特殊な能力を授かって、仲間とファンタジーの世界を旅したり、好きなものを作ることに情熱を注ぎ、異性にモテたりする。旭はそんな主人公に自分を重ねて楽しんでいた。

仕事が忙しくて、学生時代はあんなに嵌っていたオンラインゲームも出来なくなってしまった。ログインできずに数年経ち、サービス終了のニュースを聞いて寂しく思ったこともある。

今、旭が現実逃避できるのは、ちょっとした時間に楽しめるこの小説サイトだけだった。

電車がホームに到着することを知らせるナウンスが鳴り響くと、旭はスマートフォンをポケットに入れてぼんやりと線路を見つめた。

今から家に帰り、風呂に入って寝て……明日の朝にまたホームに立つまであと九時間だ。それからまた仕事の日々が始まる。

中小製造メーカーの営業として働いている旭は、常に客先と上司との板挟みだった。残業は日に三、四時間。入社して五年も経つが、役職に就ける見込みもない。
営業には向いていないのだという自覚はあったが、ではどんな職業が向いているのか見当もつかないし、長引く不況の時代に転職する勇気もなかった。
日々を死んだような感情で過ごしているうちに、旭はだんだんと自分がすり減っているような気がしてならなかった。精神的に、というだけではなく、もはや物理的にだ。時々本当に肘や腕を触って確かめてしまうほど、その気持ちは強くなっていった。
この線路に飛び込めば、もしかしたら、先ほどまで読んでいた小説のような異世界に行くことができるかもしれない。理性ではそんなことはあり得ないと分かっているのに、いつの間にか旭の思考に薄墨のように、その考えがずっとこびりついていた。
とにかく、ここではない、どこかへ逃げたい。
プワアアアアアン
電車が音を立てて滑り込んできて、旭ははっとして、ポケットの中でスマートフォンを握りしめた。手のひらが汗ばんでいる。
ぷしゅっと空気音を立てて開いたドアから中に乗り込んだ。もう夜遅いこともあり、中はかなり空いていた。
旭はシートに座ってスマートフォンを取り出すと、先ほどブックマークしておいたところからまた読み始めた。
少しだけ手が震えている。
この精神状態がよくないことは分かっていたが、どうすることもできなかった。体調が少し悪いくらいでは日常の輪の中から抜け出せない。急に倒れでもしたら入院できるかもしれないが……。
携帯がブブッと震え、メッセージが入った。父親からだ。
『今日はありがとうな、ゆっくり休めよ』
『うん』
『仕事が大変だったら、変えてもいいんだからな』
『目的もなく転職しても条件が悪くなるだけだよ』
画面の向こうで、一生懸命文字を打っている父親が見える。退職してお疲れ様の会をした日なのに、自分のことより息子のことを心配する父。
いきなり家を買うと宣言したり、会社を休んで家の改築を手伝えなんてとんでもないことを急に言い出したりもするが、深いところではこうやって考えてくれていることが嬉しかった。
『とりあえず買った家を見に行ってくれよ、金は出すから』
『分かった、来月はまとまった休みが取れそうだから行ってくるよ』
旭はメッセージアプリを閉じると、暫くホーム画面を見つめたが、やがて小説サイトを開こうと手が無意識にいつもの行動をなぞろうとした。

だが、ブラウザを立ち上げたところでその手が止まり、検索ボックスに父親の言っていた町の名前を入力して実行ボタンを押した。
『玄海町』いったい、どんな場所なのだろう。

旭が玄海町に足を踏み入れたのは、4月の下旬だった。ゴールデンウィークは休めないので、その代替で少し長めの休みが取れる。
九州というと大旅行のイメージがあったが、飛行機を使えば東京から福岡空港まで二時間ほどで着いてしまい、あっけないほどだ。
タラップを降りると、空の色も空気も違っていて驚いた。空気が澄んでいるからか、頬を撫でる風がとても心地いい。
旭はぶらぶらと町を探索してから、予約していた旅館にタクシーで向かった。
福岡空港から玄海町までは一時間半ほどかかるが、ずっと海沿いを走るために爽快感が半端ではない。小さな島が見えたり、そこに立っている鳥居がみえたりすると、冒険心が掻き立てられてつい行ってみたくなる。
タクシードライバーも気のいいおじさんで、歴史や小話などを軽妙な語り口で聞かせてくれた。
旅館は小さくて年代を感じさせる造りだったが、よく手入れされていて清潔だった。部屋でのんびり過ごし、食べきれないほど並んだ夕食の魚の旨さに感動して、夜は展望風呂で真っ暗い海に船の明かりが灯っているのをぼんやりと眺めた。
夜、和室に敷かれた布団に横になりながら、別世界に来てしまったようだと旭は思った。
大きな風呂でよく温まったせいか、体の芯までくったりと柔らかくなったようだ。日頃の緊張が全て解き放たれて、ほこほこと心地いい気持ちのまま、驚くほどぐっすりと寝てしまった。
翌朝の朝食は定番の味噌汁、味付け海苔、卵と焼き魚だったが、やはり魚は別次元に美味しい。炊き立てご飯も味噌汁も、朝の餓えた体に染み渡るような旨さだった。
その日は父親が契約した地元の工務店の人と、購入した家を見に行く予定だった。
少し緊張していたが、約束の時間より少し遅れて現れたその人の笑顔を見て、肩の力が抜けて行った。そういえば、こちらの人は冷たい表情の人が少ない気がする。
「初めまして、山口ばい、宜しくお願いします」
「あっ、よ、宜しくお願いします」
トラックで国道を暫く走り、細い山道に入った。周りは木と畑ばかりでビニールハウスなどが点在している。

「着いたばい」
周囲の風景があまりもに山の中だったので、旭は不安になりながらトラックを降りた。
そこには平屋建ての大きな家がぽつんと建っていた。一見してぼろぼろで、瓦屋根は一部が崩れてきていて、土壁ははがれ、木の板は反り返っている。
「うわあ……」
廃墟のようだ。思わず山口を見ると、にこにこしている。
「これ、住めるようになるんですか？」
「何もかもきれいにすっけん大丈夫ばい、家ん中も見っか？」
木の重そうなドアが開け放たれている広い玄関から中に入ると、大きな土間に出た。農家の古民家によくある造りで、土間から家の中に上がろうとすると、三十センチほどの高い段差がある。
「土足でよかばい」
「失礼します」
先に入った山口の後に続き、旭も建具の付いた長式台に上り、上がり框を超えて、やっと畳の上に立った。
洋風の部屋で育った旭には障子や襖に囲まれる体験は新鮮だった。いかにも日本家屋という感じでわくわくしてくる。迫力のある差し鴨居や、太くて曲がった梁はどっしりしていて頑丈そうだ。
山口の説明では柱などの家の枠組みは残して、床と建具は新品に替えるそうだ。外装や内装はぼろぼろでも在来工法で建てた枠組みは今でも十分に使用することができる。
建物のほかに広い庭や農地も付いていて、そこも見せて貰った。一戸建てどころかずっとマンション暮らしだったから、こんなに広い土地を見せられても戸惑うばかりだ。父親はこの農地をどのようにしたいと思っているのだろう。
旭は一通り案内してもらい、スマートフォンであちこち撮影した後、宿に戻るために山口のトラックに乗り込んだ。
エンジンをかけた山口は、旭のほうに首を回してにっかりと笑った。
「すぐ近うだけん棚田ば見て行かんね？」
「棚田？」
「浜ノ浦ん棚田は有名で、今は特に水ん入っとってきれいばい」
「もしよければお願いします」
「そいぎ行こうばい」
また山道を走って国道に戻り、少し行ったところで駐車場に停車した。家の近くに有名な場所があるなんて、得した気分だ。
山口に続いて展望台に登ると、目の前に広がる風景に息を呑んだ。
高台に立っている旭の足元から海に向かって駆け下りていく急こう配に、階段状に重なり合って造られた無数の田んぼが見える。

形も大きさも違う、緩やかな曲線を描いて土地に寄り添うように造られた田んぼは、その全てが水を湛えて、海と同じ柿色に染まって揺れていた。
言葉もなく見惚れている旭に向かって、近くに立っている山口がぽつりとつぶやいた。
「きれいじゃろう。江戸時代から受け継がれてきたもんやけんな」
江戸の昔から変わらない風景。旭はふと体ごと心がタイムスリップしてしまったような気がした。
夕日を映して刻一刻と色を変えていく棚田。徐々に田んぼの赤さが増していき、それと共にあぜ道が暗くなって、まるでステンドグラスのようだ。
そんな棚田を見つめていると、胸がきゅうっと締め付けられて、矢も楯もたまらず誰かを抱きしめたくなるような、不思議な気分になっていた。
年老いてきた両親や古い友人の顔が思い浮かび、切なさと安心感に満たされて、そこに佇む旭の器もまた、水を湛えて揺れていた。
胸の中に清々しく入り込んでくる土や草木の匂い、夕暮れの少し湿った空気、そして目の前の絶景がもたらした感情は旭に強烈な癒しを与えてくれた。
「雨のあゆっけん、そろそろもどろ」
「あ、はい」
この優しい言葉は音楽のように目の前の風景に溶け込んでいる。
トラックで宿まで送って貰い、一風呂浴びて布団に入った後も、大作映画を見たかのようなゆるやかな余韻が続いていた。
次の日は町役場に行って父親に代わり、いろいろな手続きをすることになっている。旭はそのことを考えながら、やがてゆったりとした眠りに落ちていった。
三日目の朝、旭は早めに食堂に来ていた。
何回かこの旅館で食事をしたが、しみじみと米が旨い。まず器に盛られた姿がつやつやしていて綺麗だ。口に入れると香りのよさと甘味を感じ、そして一粒一粒がしっかりしていて噛み応えがある。握り飯にしたらかなり美味しそうだ。どこの米だろうと気になってつい「この米、美味しいですね」と宿のおかみさんに声をかけると、「こりゃあ棚田米ばい」と答えてくれた。
そうか、あの綺麗な水田のお米を食べているのか、と思うと感慨もひとしおだ。
玄海町役場は予想以上に大きくて綺麗な建物だった。受付でまちづくり課まで案内してもらい、そこで定住する人向けの奨励金や空き家バンクの家を購入した人向けの補助金など、各種の補助金制度の説明をして貰った。
最初はしっかり話を聞いていたが、かなりたくさんあるので疲れてきてしまい「とにかく使える制度は全部使わせてください」とお願いして、次々と用紙に記入していった。
首都圏では考えられないくらい補助金制度が充実していて、これを利用すればかなりの助けになるだろう。
やっと用紙の記入が終わり、処理のほうに回してくれた女性が戻って来た。三十代ほ

どだろうか。長い髪を編み込んであり、しっとりと落ち着いた風情の中で、悪戯っぽく輝く大きな目が印象的だ。
「お疲れさんじゃったね」
こっちの言葉は女性が話すと殊更に可愛いくて、つい聞き入ってしまい、返事を返すのがワンテンポ遅れてしまう。
「いえ……大丈夫です」
それから少し世間話をして、この土地の魚や野菜、米の美味しさを語った。棚田がとても綺麗だったことも。
滞在はいつまでかと聞かれて、実は明日帰るんです、と答えると「また来んしゃい」と懐っこい笑顔を見せてくれた。

関東に帰った後も、玄海町のことが忘れられなかった旭は、棚田のフェイスブックをフォローしたり、玄海町に住む人のブログなどを見て回っていた。
仕事は心底嫌いになっていたが、転職する勇気はなく、このままずっとズルズル続けていくのかと思っていた矢先、旭に転機が訪れた。
別部署の同僚がIT系の会社を立ち上げることになり、旭に声がかかったのだ。
今は営業の仕事をしているが、プログラミングは学生時代に齧ったこともあり、自分の仕事を効率化するために小さなシステムなどを組むこともあった。それを評価してくれていたのだ。
旭としては、人と接するのに疲れたこともあり、プログラミングのような地道な作業が向いているのではと思っていたところだったから、自分の可能性を知る為にも違う道に進んでみたかった。
しかしそれ以上に魅力的だったのは、同僚の会社が勤務形態を在宅ワークにすると徹底しているところだった。給料はそれほど多く出せないが、出社を強要することは絶対にない。そうして優秀な人材を世界各地から募集するつもりのようだ。
オフィスを持たないから経費は必要最低限に抑えられる。会議はリモートで行い、仕事はきびしく評価されてすぐに給与に反映される仕組みだ。
「本当に出社しなくていいんだな？」
「いいも何も、オフィスは無いからな」
「じゃあ俺、今の家から引っ越してもいいか？」
「どこに行くんだ？」
「……九州」
友人はやはり少し驚いたが、両親の買った家が九州にあり、もうすぐそこに引っ越す予定だと言うと「いいじゃないか」といつもの貫禄のある笑顔で頷いた。
「社員には私生活も充実したものにしてほしいからな」

こうして、旭が諸々の手続きを終えて引っ越しの準備ができたのは、五か月後の九月中旬だった。

父親が購入した古民家の改築はというと、既にほぼ終わっていて、もう住める状態になっていた。ところが、肝心の父親は退職後も会社に引き留められてしまい、一年間の約束で顧問として残ることになってしまった。

一方、旭は転職して収入減での再スタートとなるため、家賃を払い続けることが厳しく、両親より一足先に九州に旅立つこととなった。

空港からタクシーで古民家に直行した旭は、あまりの変わりように目を見張った。

朽ちてぼろぼろだった外観は、焼杉板としっくいで綺麗に貼り直されていた。深い黒の焼杉板と、真っ白なしっくいのコントラストが美しすぎて、思わず見入ってしまう。玄関の戸もすりガラスの嵌った和風デザインの新しいものに変わっていた。とても軽く動かせて気持ちがいい。

土間の広さや構造は変わっていなかったが長式台が新しくなっただけで、印象がずいぶん違う。畳は全て無垢材のフローリングに貼り替えられていて、和モダンな感じが強い。古い欄間や障子の枠はそのまま使ったということで、アメ色の美しいアンティークな色合いと、新しく入ったナチュラルウッドの明るい色合いが不思議と落ち着く空間を作り出していた。

10LDK の家は現代建築らしくスッキリ生まれ変わっているのに、気づくと古く優美なものもちゃんとここにある。

手足を広げて寝転がると、無垢材の肌触りのよさを感じながら天井の梁の存在感にどきどきする。天井板が明るい色に貼り替えられているから、かえって黒鳶色の古い梁が浮き立つように見えて、そのどっしりした太さ、少し曲がっている面白みのある形は見ていて飽きない。

こんなに大きく立派な家の中に居るのに、テントで寝ている時のような……自然に抱かれている気がしてくる。

引っ越しのトラックが来る前日の、その夜。旭は寝袋にくるまって、久しぶりに楽しい気持ちで眠りについた。

翌朝から、旭はかなり忙しくなった。引っ越しのトラックが到着し、荷ほどきをして簡単なワークスペースを作らなくてはいけなかったからだ。

ネットだけは先につなげて貰っていたので、PC の設置と周辺機器の接続をして、なんとか仕事ができる体制を整えた。

それからは新しい会社の講習を受けながら、プログラムについて勉強し直していった。

新しい分野の知識を学んでいくことは楽しくて、やりがいもあった。給料を貰って勉強させてもらっているわけだから、時間を惜しんで吸収していった。

昼間はずっとパソコンの前に座り続けているため、旭の食事は必然的に買いだめしてあったレトルト食品のローテーションになっていた。
そんな日が一週間ほど続いたある日、戸を叩く音がした。最初は風の音かと思ったが、規則的に何度も続くので行ってみると、すりガラスの向こうに人の影がある。戸を開けると、手ぬぐいを帽子の上からほおかぶりして重そうな袋を背負ったお婆さんが立っていた。
ちょうど夕刻で、沈む日が皺の深いやさしい顔を柔らかく照らしている。
「道に迷うてしもうて」
「……道に、ですか？」
地元の人が道に迷うことなんてあるのだろうか。そんな旭の心を読んだように、お婆さんはにこにこと笑った。
「夕方は逢魔ん時て言うて、たぬきに化かされやすかとばい」
おうま？　聞きなれない言葉だが、ここの方言だろうか。最初のほうは聞き取りにくかったが、最後のたぬきに化かされる、というのは分かった。
道に迷ったことをたぬきに化かされたと表現したのだろうか。お年寄りの言い方は時々可愛く感じて好ましい。
「たぬきに化かされちゃったんですね、それは大変だ」
「日の沈むまでは帰れんけん、ちかっと休ませてくれん？」
「ああ、どうぞ、どうぞ」
お婆さんは玄関から入り、長式台の段差に腰を下ろして、重そうな背負い袋をよいしょ、と下ろした。
「食べ物ば持っとったけんたぬきに狙われたんね」
お婆さんは背負い袋の中をがさごそと探して、大きなタッパーを取り出した。
「いりやきだばってん、食ぶっと？」
いりやきって何だろう。ここの方言は大体慣れてきたが、少し理解するのに時間がかかることばもある。おそらく食べ物を勧められているとあたりをつけて、旭は返事してみた。
「それはお婆さんの夜ごはんじゃないですか？　申し訳ないし、いいですよ」
「たぬきのあんたに食べさせちゃりよって言うけん、食べんしゃい」
また、たぬきが出てきた。確かにたぬきが言ってるから食べなさいって言われたら断れないし、本当に面白い表現だ。
「ありがとうございます、それじゃ遠慮なくいただきますね」
旭はタッパーを受け取って奥に持って行った。家の器に移そうと蓋を開けると、鶏肉と里芋、ごぼう、人参などたくさんの野菜がぎっしり詰まっているのが見えた。みなよく煮えていて、つやつやしている。まだ温かくふうわりと漂うごぼうの香りが堪らない。ずっとレトルトだったから、体がこういうものを欲しているのか、胃がきゅうっと鳴っ

た。あまりに旨そうだったので、器を移す時に鶏肉を一切れつまんでしまった。
鶏肉のコクと混ざりあった濃厚な醤油の旨味と沢山の野菜の味が舌にじんわりと広がる。旨い、あまりにも旨い。立て続けにいくつか口に放り入れ、もごもごしながらラップをかけてテーブルに置いた。これは夕飯が楽しみだ。
タッパーを洗ってていねいに拭き取り、キッチンに置いておいたお菓子をその中に入れた。ペットボトルのお茶も持って玄関まで戻り、お婆さんにそれらを渡した。
「ありがとうございました、いま少し食べちゃったんですけど、すっごく美味しかったです」
「いや嬉しか～」
お婆さんはにこにこしている。
「これ、お返しにどうぞ」
お菓子の入ったタッパーとお茶を渡すと「そがんのよかとに」と言っていたが、受け取ってくれた。
旭はお婆さんの隣に座り、開け放した玄関から夕焼けを眺めながらぽつりぽつりと話を始めた。普段はあまり自分のことは話さない旭だったが、ずっと引き籠っていたからか、なんだかすごく話したい気分だった。たどたどしい旭の話を、お婆さんは頷きながら黙って聞いていてくれた。
秋の真っ赤な夕日は吸い込まれるように落ちていき、やがて最後の光が山の端に入って見えなくなると、お婆さんは立ち上がった。
「日の沈んだけんそろそろ帰るばい」
「暗いと危なくないですか？」
「くろうならんと帰れんとよ、ちょうちんの光らんけん」
とことこと土間を歩いて玄関の外にでたお婆さんを追いかけていくと、戸の前にちょうちんが二つ、並べて置いてあった。
お婆さんがちょうちんを引っかけてある短い竿を手に取ると、ぽんっとオレンジ色の明かりが灯った。
「ほら、こりば持ちんしゃい」
地面に置かれたもう一つのちょうちんを指されて、旭は恐る恐るその竿を握った。ふわりとちょうちんが浮いた瞬間、またぽんっと明かりが灯る。
「ちょうちんの二つなかと帰れんけん、送ってくるっと？」
「あっ、はい」
歩き出したお婆さんの後に続き、山道を五分ほど歩いて舗装された道路に出た。
「ここまでよかよ、あいがとうね」
お婆さんは旭を振り返ってぺこりと頭を下げた。
「あの、このちょうちんって誰が置いていったんですか？　どこに返せば……」
「元ん場所に戻せばたぬきの持っていくばい」

「分かりました、元の場所ですね」
お婆さんは「そいぎーね」と手を振って帰って行った。
またたぬきだ。もしかしてたぬきとは町内会の名前とかなのだろうか。旭はしげしげとちょうちんを眺めた。丸くて小さいちょうちんは、竹ひごに和紙が貼られているらしく、ざらざらした風合いがある。昔はろうそくだったのだろうが、今は電気式になっているようで、仕組みは分からないが、中央には火の玉のようにふわふわと明かりが浮いているのが見える。外側の和紙には黒く塗りつぶしたひょうたんに、白抜きで『た』の文字が書かれていた。
「たぬきのちょうちんか」
旭はふふっと笑いながら、ちょうちんを下げて家のほうに向かって歩き出した。歩くたびに竿の先のちょうちんが揺れて、周りの草や木が不思議な影を作り出す。いつもの道がなんだか幻想的に思えて、せっかく山の中に住んでいるのだから、こうやって散歩するのも悪くないと思った。
それからお婆さんの野菜の味が忘れられなかった旭は、時々朝から買い出しに行くようになった。
直売所では新鮮な野菜を安く手に入れることができて、そういうものは手間をかけなくても本当に美味しいおかずになる。
オクラの大きさに驚いたが、塩で板摺して、一分茹でて鰹節と醤油をかけて食べる。歯ごたえがよく、大粒のぷりぷりした白い種がぎっしり詰まっていて、元気の源を食べているようだ。甘とうがらしをごま油でちりめんじゃこと炒めても美味しい。それに玄界灘の魚だ。買い出しに行った日は刺身を食べて、干したものは冷凍しておく。それを焼くだけで関東では味わえないような極上の焼き魚定食の出来上がりだ。
ある日、思いついてまた棚田に行ってみた。田んぼに水は入っていなかったが、彼岸花が咲き誇っていてため息の出るような光景だった。
『おかえり』そう言ってくれているような美しい夕日を眺めながら、旭は日が沈むまでそこに立ち尽くしていた。
そうやって少しずつ出歩くようになった旭は、かなり前に同じ部署だった同僚に勧められてアカウントだけ取ったインスタをまた始めてみたくなった。目の前の景色が綺麗すぎて、皆に見て貰わないと勿体ない気がしたからだ。
在宅ワークの休憩時間に外に出て、手始めに家を撮ることにした。今日は快晴で気持ちがいい。スマートフォンを構えて撮影ボタンを押しながらぐるりと家の周囲を回っていると、普段は行かない裏手に大きな石があることに気付いた。まるで鋭利な刃物にスパッと切り裂かれたような亀裂が入っている。
「この石、なんか風情があっていいな。この切れ目がまた味があるっていうか……こういう自然のものを取り入れて格好いい庭を作ってみてえなあ」
まったく手を付けていないため、荒れ果てている家の周囲を見回しながら、旭はつぶ

やいた。
その日の夕方、戸を叩く音がして、行ってみるとすりガラスの向こうに人の影がある。
誰だろうと思いながら戸を開けると、そこに居たのは五十代くらいの日焼けした男性だった。
「道に迷うてしもうて」
人のいい笑顔といい、セリフといい、二週間ほど前に迷い込んできたお婆さんを彷彿とさせる。
「……それは大変ですね」
「日の沈むまでは帰れんけん、ちかっと休ませてくれん？」
「ど、どうぞ」
おじさんは土間を通って、大股を開いて長式台にどっかりと座った。
激しい既視感に眩暈を起こしそうだ。この人も食べ物を持っているからたぬきに狙われたとか言い出すのだろうか。だが男は現場の作業服のようなつなぎを着て、手ぬぐいを首から下げているだけで、荷物らしい荷物はない。
「どうして日が沈むまでは帰れないんですか？」
恐る恐る聞いてみると「たぬきに化かされたとたい」と返事が帰って来た。
「その、たぬきっていうのは、何かの、例えば町内会とかの名前なんですか？」
「たぬきはたぬきばい、耳ん丸っこか、犬みたいなやつんことや」
男は両手で握りこぶしをつくり。自分の頭にあてて耳のようにしてみせた。
その動作が面白くて愛嬌があり、旭はぷっと吹き出してしまった。
「この辺りにはたぬきが出るんですね」
「おお、ようけおるばい」
『ネズミにひかれる』という言葉があるように、たぬきと慣れ親しんだ生活だから何かあると「たぬきが～」というのが慣用句のようになってしまっているのだろうか。それとも、新参者だからからかわれているのか。いや、ひょっとしたらこのおじさんが実はたぬきだったりして――。
旭は日焼け跡がまだらになった男の顔を見つめた。なんとなく目の周りの色が濃くなっていて、たぬきっぽいと言えないこともない。そうしてくると黒目がちでくりくりした真ん丸な目も、ずんぐりした体形もそれっぽく思えてきてしまう。
それから旭はおじさんの隣に腰かけて、夕日を見ながら話をした。お婆さんと違い、男は話好きらしく積極的に旭に質問して、自らもよく語った。
話が趣味のほうに移った時、最近はインスタくらいしかしていないという旭に、男はシーカヤックをやっていると得意そうに話した。
「シーカヤックってボートみたいなものですか？」
「そうばい。穏やかな内海ばゆっつらゆーっと漕ぐとは気持ちよかぞ」
小さなカヤックから大海原を見る気分はどんななんだろう。さぞかし爽快に違いない。

「どんなものが見えるんですか？」
「岩や無人島とかいろいろあるばい」
「おおっ、無人島ってなんか冒険っぽくてドキドキしますね！　いいなぁ」
「二人乗りばってん相方がおらんけん今度一緒に来っか？」
「いっ、いいんですか!?」
こんなに簡単に誘われてしまっていいんだろうか。でも凄く興味があるし、ぜひやってみたい。
「来週ん日曜日はどうや？」
「大丈夫です！」
こうして約束を交わしているうちに、日はどんどん傾いてきた。旭がはっとして外に出ると、もう玄関にはちょうちんが二つ置かれていた。手に取って確かめると、あの黒く塗りつぶしたひょうたんに白抜きで『た』の文字が書かれている。お婆さんの時と同じものだ。あの後、玄関に置いておいたちょうちんは翌朝には忽然と無くなっていたが、それがまた魔法のように現れたわけだ。
「たぬきのちょうちんだ！　これは誰が置いていったんです？」
「たぬきばい」
予想はしていたが、まったく参考にならない答えだ。
「たぬきが、こう口に咥えて持ってきたって言うんですか？」
「そうかもしれんなあ」
男はからからと笑っている。もしかして、ここの住民は夕方になって道に迷うことも、夜にならないと帰れないことも、このちょうちんの存在も、自然現象のようにそのまま受け入れているのかもしれない。
ちょうちんはやはり暗くなってから手に持つと、ぽんっと柔らかく光った。その優しい光はホタルのようにゆっくり点滅しながら道を照らしている。
「これ、また玄関に置いておくと、たぬきが持っていくのかな」
道を歩きながらぼそりと呟くと、男は「そうばい」と答えた。
「そっか……」
いったい、誰がなぜ、こんなことをしているのだろう。
目的も理由も分からないし、住民の態度に不可解な部分もあるが、旭は怖いとは思わなかった。
この自然の中で暮らしていると、解明できない不思議なことがあってもいいような気になってくるのだ。
おじさんを送った後、旭はちょうちんを玄関の横にきちんと置いた。そしてそれを一生懸命回収するたぬきを想像して、またふふっと笑ってしまったのだった。

それから、旭は休みのたびによくおじさんとシーカヤックをするようになった。最初は内海で練習して、慣れてきたら外海にも連れて行って貰えた。
シーカヤックから撮る景色は、臨場感のある個性的なものばかりで、インスタがかなりにぎわって来た。特に、遮るもののない一面の夕日の中に呑み込まれると、バーチャルリアリティのデジタルアートの中にいるような気分を味わえる。
海の上にぽっかり浮かぶ面白い岩に連れて行って貰ったこともあった。カエルの形をした岩なんて、ファンタジー世界の地図のようだ。ここで釣りをしていると、ストーリーのあるゲームの世界でミニゲームをやっている気分になってくる。
『『聖騎士だけど途中のミニゲームに嵌って、魔王討伐を放棄して釣りをして暮らすことにしました』ってまるで異世界小説じゃん」
釣り糸を垂らしながらぼんやりと思っていると、ここに来てから異世界小説を全く読んでいないことに気付いた。求めていた世界の中に居る気がして、読んでいても入り込めなくなってきたのだ。それよりも、庭づくりの本を読んでいたほうが面白い。ここには自分が作りこんでいける荒野が沢山あるのだから。
旭はそれからも庭を整備したり、家庭菜園を作ったりと、順調に自分の世界を広げていった。相変わらず人は迷い込んできていたが、不思議なことに庭に手を付けてすぐに庭師の人が来て段取りを教えてくれたり、家庭菜園で助言がほしい時に農家の人が来たり、まるで必要な人を派遣してくれているかのようだった。
そんなこんなで冬が過ぎていき、また春が来た。しかし引っ越してくるはずの父親は会社に引き留められてもう一年間、顧問を継続することになってしまった。
「父さん、来たらびっくりするだろうな」
旭はにやにやしながら、丹精込めた庭を窓から眺めて満足していた。来週はちょっとした東屋をつくるつもりだ。
すると、玄関のドアを叩く音がした。もしかして大工さんでも迷い込んできたのか？とドアを開けると、そこに立っていたのは女性だった。しかも、かなり見覚えのある――。
「東野さん!?」
「えっ、ここ……うそっ、中村くんの？」
東野は、以前勤めていた会社の同僚だ。昼休みにタブレットで異世界小説を読んでいるのを見て、話しかけてきた。
彼女も同じ小説を読んだことがあり、趣味が合って少し仲良くなった。インスタを勧めてきたのも彼女だった。
しかし、部署が変わってからは顔を合わせることが無くなり、次第に疎遠になっていった。そして会社を辞めた後はもう連絡手段が無くなってしまっていた。
「あっ、会いに来たとかじゃなくて、ほんと偶然でっ……！！」
「それは分かるけど、何でここに？」

「中村くんのインスタが最近凄く綺麗で、見てるうちによく出てくる棚田を見たくなって……」
「アカウント作ってから何年も放置してたのに、チェックしててくれたんだ」
「うん……会社辞めたって聞いて、元気してるかなって思ってたの」
会社の中での見慣れたスーツ姿の東野とは違い、私服の彼女は別人のようにリラックスして溌剌としている気がした。
「私、この近くの民宿を予約してるの。でも棚田を見た後に待っててくれたタクシーが居なくなってて、タクシー会社に電話しても、宿屋に電話しても繋がらなくて……歩いてたら迷っちゃったみたいで……」
不安だったのか、彼女は震える声で矢継ぎ早に状況を説明してきた。
棚田の周辺に宿屋は無かった筈だが……。それにここも棚田からは歩くと結構離れている。よく徒歩で来れたなと感心してしまった。
「その予約した宿屋の住所を教えて」
東野がスマートフォンを取り出して、予約確定メールの住所を見せてきた。
「あっ！　このメールに書いてある住所ってここだよ！」
「中村くん、民宿やってるの？」
「やってないよ！　何だろう、聞いたことのない宿屋だけど」
メールの文末に記載されている店名は「三十六代目　女石の古狸」と書かれている。
電話番号は知らない番号だ。かけてみても『現在使用されておりません』のアナウンスが流れる。
宿屋の名前はネットでどんなに検索しても出てこない。ただ一つ、「おじいさんの昔話」としてこの玄海町の民話を紹介したページが引っかかるだけだ。
「……もしかして、たぬきに化かされたのかな……？」
「ちょっと、やめてよ！」
「ごめんごめん、それはそうと、今夜の宿はどうするの？」
「そうだったわ……」
立ち尽くす東野の背後は、既に日が暮れて暗くなった景色が見える。
「とりあえず上がりなよ」
「ありがとう」
東野は広い土間や高い長式台に驚きながら、靴を脱いで部屋に上がってきた。勧めたソファに座りながら、まだ諦めきれないのかスマートフォンで必死に調べている。
「はぁ、困ったなあ。三泊四日の予定だったのに」
「今日が初日？　荷物はどうしたの？」
「重いから家から送ったの。明日、宿に届くはずなんだけど」
「送り先がここの住所になってれば、ここに届くと思うよ」
「荷物も消えちゃったらどうしよう～！！」

「落ち着いて、今日はここに泊まりなよ、俺はソファで寝るから」
異常な事態にパニックになる東野を宥めながら、旭は食事や風呂の世話をして、夜は布団を明け渡して寝かせてあげた。
東野が家から送った荷物は、翌朝には無事に旭の家に届いたが、心細そうにしている東野を見捨てておけず、三泊四日の間は家に泊めて、この地域を案内して過ごした。
もちろん、ただの親切心からではない。不安がる東野を宥めるうちに、旭もまた離れがたい気持ちを東野に対して抱き始めていたのだ。
旭はあまり遠くには行かなかったが、素晴らしい眺めの海上温泉や、船でしか行けない秘境の海鮮レストランなど、玄海町のとっておきの場所に案内した。
玄界灘というと魚をまず思い浮かべるが、佐賀牛も有名で、牧場に足を運ぶと東野はお土産を色々と買い込んで喜んでいた。棚田にももう一度行きたいということで、近くのジェラート工房で買った本格的なジェラートを楽しみながら二人で眺めを楽しんだ。海からの風に吹かれて揺れる東野の長い髪を見ていると、彼女が自分の恋人で、デートしているような感覚になってくる。
最終日は飛行場に送っていく前に東光寺に立ち寄った。平安時代末期から伝わるという、薬師如来像の表情が大好きだったから、彼女と一緒に見たくなったのだ。
「昔のものって、どうしてこんなに優しいんだろうね」
東野は、目を閉じて座っている薬師如来像の周りをゆっくり回りながらつぶやいた。
「薄暗いからなのかな、少しずつ表情が違って見える」
「はっきりしない、この曖昧さがいいんだよね。落ち込んでるときは慰めてくれるような気がするし、腹を立ててる時は諌めてくれてる気がする」
「中村くんも怒る時があるんだ」
「あるさ、俺だって」
怒りの感情が無いように思われていることが少し心外だったが、外に発散するタイプじゃないから仕方ないのかもしれない。
「そういえばさ、まだ読んでる？　あのサイトの異世界小説」
お寺を出ながら、東野は小声で聞いてきた。会社で大っぴらに話すのは恥ずかしいので、いつも昼休みにこそこそ話していた、あの時と同じノリだ。
「それがさ、ここに来てから読む気がしなくなって」
「あ～……なんとなく分かるかも。外にこんなに五感を刺激するようなスポットが沢山あると、そっちに興味が行くよね」
「うん。でもさ、何か面白いのがあったら教えてよ。夜寝る前とかは暇だからまた読んでみる」
「じゃ、連絡先交換しよ。今回のお礼に何か送るし」
「いいって、そんなの」
「そういう訳にはいかないよ！」

福岡空港に着いてからは、一緒に土産物を見て回ってフライトまでの時間を潰した。
面白いグッズを見て一緒に笑い合っている時も、もうすぐ彼女が居なくなると思うと少し寂しかった。
つばがひらひらした柔らかな麦わら帽子を片手で押さえながら、何度も手を振って、搭乗口に消えて行った東野。旭は彼女が乗った飛行機が飛び立つ瞬間に撮影ボタンを押した。
その日、新しく旭のインスタにUPされた、夕日を背負った飛行機の写真はとても迫力があるのに、どこか懐かしかった。
その写真には一言だけ『そいぎーね』とキャプションが付けられていた。

玄海町役場のまちづくり課では、女性事務員がにこやかに新しい定住者に書類を渡していた。
「では、こりが定住促進奨励金、玄海町空き家バンクリフォーム等促進事業補助金、木造住宅耐震改修事業費補助金のご案内と書類ばい」
「ありがとうございます。他に何か受けられる補助はありますか？」
「あとはこりかな、地域ふれあいサービス」
「たくさんありますね。家でゆっくり確認しておきます」
「そいぎ封筒に入れとくね」
女性が書類一式を封筒に仕舞おうとした時、小柄で小太りな男性がカウンターの後ろから飛び出してきた。
「小波さん、地域ふれあいサービスん書類はちゃんと口頭で説明してもらわんば困るばい」
「あっ、そうやった。ごめんなさい、古屋さん」
女性は仕舞おうとしていた緑色の紙を取り出した。そこには『地域ふれあい促進事業〝縁〟』と書かれている。
「玄海町ん行っとう事業で、必要な時に必要な人ば縁で結ぶサービスたい」
「面白そうですね！　人とのつながりっていいなぁ」
隣で聞いていた古屋は、慌てて口を出した。
「いきなり人ん来っこともあるけん注意してくれんね」
「そういうのは、田舎だったら当たり前にあることですよね。大丈夫です」
「そいぎルールばご説明すっね、まず人ん来っときは夕方ばい。そして日ん暮るっまでは帰れん。玄関に二つのちょうちんが置いてあるけん……」
説明を聞き終わって、署名していた定住者は、ふとペンを止めた。
「でも、必要な時に必要な人をって、どうやって分かるんですか？　係の人と常に連絡を取ってないと難しいですよね」
「そりゃあ大丈夫ばい。うちん係員は優秀やけん」

女性事務員は、隣でうんうんと頷いている古屋を見た。
彼の名札には「まちづくり課　地域ふれあいサービス係　三十六代目　古屋　田貫」と書かれていた。